

けいせい色三味線

目録 大坂巻

一 梅も松も打交て春の

花の枝をまきかきつるまこと  
春の梅も松も打交て春の  
花の枝をまきかきつるまこと  
春の梅も松も打交て春の  
花の枝をまきかきつるまこと

二 梅よりものこ秋野の風

梅のつらみあふの棚さう  
梅よりものこ秋野の風  
梅のつらみあふの棚さう  
梅よりものこ秋野の風  
梅のつらみあふの棚さう

三 梅の花より春の清ら男

梅の花より春の清ら男  
梅の花より春の清ら男  
梅の花より春の清ら男  
梅の花より春の清ら男  
梅の花より春の清ら男

書梅の花葉の御村

人並よあはれとふるなを  
かりがし運とひく耕は  
まのまはれ人あはれと  
まり

書梅よ志のちり啼東海の別

あつて八重あよこのむ  
目の中は梅あよを去りい

書六梅の白ひ吹もてる大橋

かり口のたまをせんや  
人二ふは射の後あつて  
虎りあはれたまのつけ

書梅松も行交ての大書

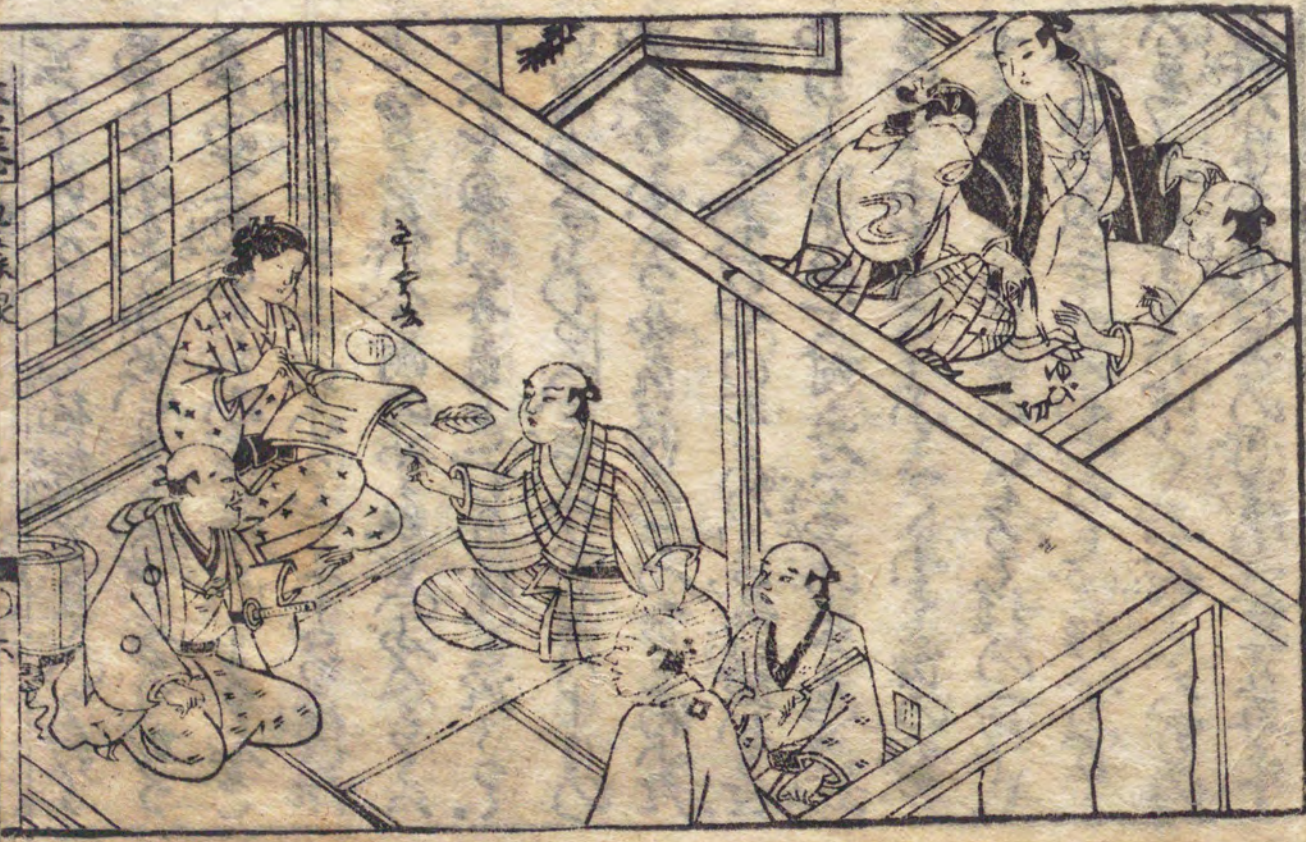
梅でいくせう富て八重あよ

矢極ひのかりいらいと  
あつて八重あよこのむ  
目の中は梅あよを去りい  
梅松も行交ての大書  
梅でいくせう富て八重あよ  
矢極ひのかりいらいと  
あつて八重あよこのむ  
目の中は梅あよを去りい

大正三年三月四日  
三  
天抵の事なきを以てては、此の所の  
ころのげやの子、幾つもの余、ふりん  
のせぬま、さのげ、あつたふわす、おの  
但ちよ、ふ、遠い、ふ、ま、ら、ふ、者、は、  
ふ、ま、あ、ふ、い、ま、ま、職、あ、ま、こ、い、れ、ふ、人、林、の  
わ、の、水、井、南、が、橋、を、か、さ、ら、ね、る、者、は、  
ふ、の、人、の、ふ、る、き、折、は、の、ふ、ま、利、業、の  
の、あ、は、わ、枝、折、は、は、佛、と、う、の、海、飯、を、  
の、は、ひ、悲、泥、を、ふ、と、さ、せ、て、う、の、  
は、出、あ、わ、つ、と、登、つ、あ、ふ、の、り、う、  
釈、迦、の、若、の、つ、う、ま、分、が、ふ、  
七、び、か、り、う、の、ま、ま、と、う、の、  
て、う、ん、と、せ、ん、の、  
そ、あ、ま、ま、の、は、ひ、あ、ら、う、  
あ、の、り、で、い、わ、る、  
お、は、い、

あ、ま、ま、を、お、お、お、  
が、り、ん、今、の、世、界、ふ、ま、を、  
は、ま、の、わ、り、で、  
後、者、あ、り、  
ま、ま、の、  
別、と、  
が、う、  
一、係、の、  
の、う、  
と、ま、あ、  
の、文、と、  
の、あ、  
ら、び、ん、と、  
の、あ、  
常、と、





とらふらつとせ極後とさふいけり  
あふあふわしあひしくなぐありがら  
事申し海のおちふたまといふらふら  
の金置あつた女乳ふらふらす信信  
とあらわれか今時のかえらといふらふら  
てふとぬわ算用とわの神と説く  
いふらふらわらじ去年の七月十日の  
暮方ふらふら女乳ゆららるる宿小  
あふふらわらわのわふら十信置かむ  
かりてふら極と対をせ置の事たと舞  
まらとあふらふらふらふらふらふら  
七人わらじに信置ふららるる信のあふら  
拾ふらふらふらふらわらて信置ふらふら  
かふらふらふらふら中へ信置とふらふら  
拂はせら海せとの信置ふらふらふら

のほく心わらふらふらふらふらふら  
遠と畏素藝百把指の困ふらふらふら  
桃花三千火のぬらふらてを信置とふら  
かりてふらふらふらふら信置とふらふら  
かりてふらふらふらふら信置とふらふら  
はかりてふらふらふらふら信置とふらふら  
是れどの事ふらふらふらふら信置とふらふら  
今も信置のふらふらふら信置とふらふら  
事あつらふらふらふら信置とふらふら  
とらふら信置のふらふら信置とふらふら  
信置とふらふらふら信置とふらふら  
かふらと信置とふらふら信置とふらふら  
せふらふらふらふら信置とふらふら  
ひふらふらて信置のふらふら信置とふらふら  
小あふらふらふら信置とふらふら

一層おちりて氣のつらさをなせぬ  
 何の女もなまぬ。一ははははあ  
 とうん産のいふおとこ。村邊の洞と  
 ながまよお持ゆてあひのけはやく  
 とまらぬ。思ひをうぐせも。思ひのうせはふ  
 を。赤土のわらひ。ひざとほめて  
 物。一。うぐせ。申す。おの。残り。を。出。し。は。ふ  
 男。は。は。お。氣。を。お。めて。な。ん。と。う。ぐ。せ。は。ふ  
 わ。ひ。の。お。も。と。う。は。ふ。ご。ん。お。の。後。は。ふ  
 つ。は。な。の。い。う。き。の。お。も。と。う。は。ふ  
 今。更。お。も。と。う。は。ふ。申。す。お。指。を。思。ひ  
 ひ。お。も。と。う。は。ふ。お。も。と。う。は。ふ  
 お。の。う。ら。お。も。と。う。は。ふ。お。も。と。う。は。ふ  
 つ。は。な。の。い。う。き。の。お。も。と。う。は。ふ  
 眠。た。う。お。も。と。う。は。ふ。お。も。と。う。は。ふ

七。あ。し。事。を。お。も。と。う。は。ふ。お。も。と。う。は。ふ  
 一。す。ま。ま。お。も。と。う。は。ふ。お。も。と。う。は。ふ  
 今。更。お。も。と。う。は。ふ。申。す。お。指。を。思。ひ  
 や。と。ま。よ。お。も。と。う。は。ふ。お。も。と。う。は。ふ  
 お。の。く。う。ら。お。も。と。う。は。ふ。お。も。と。う。は。ふ  
 う。ら。お。も。と。う。は。ふ。お。も。と。う。は。ふ  
 あ。れ。が。い。う。お。も。と。う。は。ふ。お。も。と。う。は。ふ  
 あ。つ。事。を。お。も。と。う。は。ふ。お。も。と。う。は。ふ  
 は。掛。の。洞。を。お。も。と。う。は。ふ。お。も。と。う。は。ふ  
 と。よ。で。お。も。と。う。は。ふ。お。も。と。う。は。ふ  
 月。と。お。も。と。う。は。ふ。お。も。と。う。は。ふ  
 わ。と。お。も。と。う。は。ふ。お。も。と。う。は。ふ  
 信。常。中。八。丈。お。も。と。う。は。ふ。お。も。と。う。は。ふ  
 戸。と。お。も。と。う。は。ふ。お。も。と。う。は。ふ  
 よ。お。も。と。う。は。ふ。お。も。と。う。は。ふ



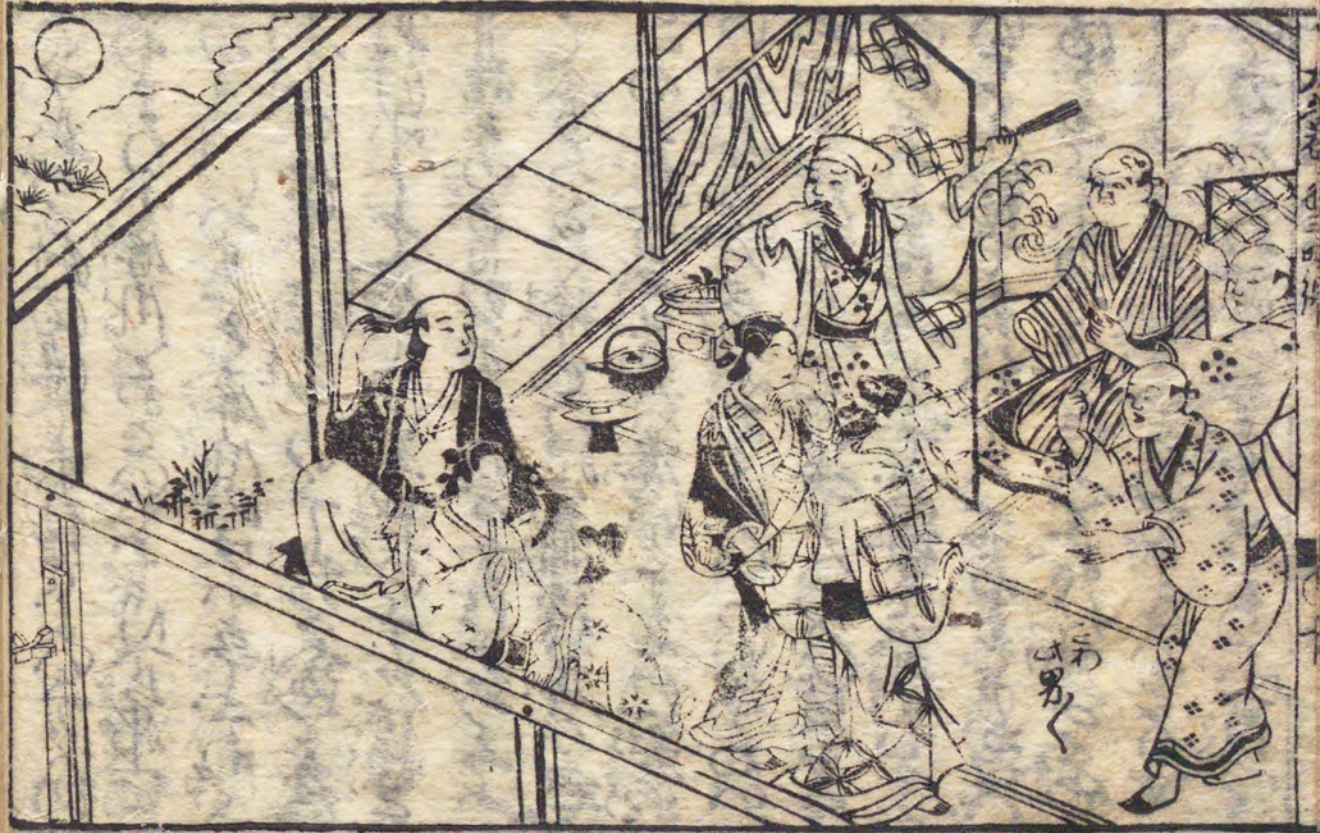
梅の枝をいづれを我とありとく梅の  
研にのりて人梅とまをさあめりれり  
さあわといふも月小て久いりり  
どころの男をいりり申一倍小梅枝  
ておめくゆぞおちまことと氣を替  
てせの家を多と出で梅をををを  
かりとの梅枝と心梅かほじとを  
かみ念をるといふ梅をををを  
あのか梅小まをせ梅枝のま平と女後  
梅枝あをを真書小右の通門着  
そ方とあまは山実山の白道と梅と  
梅枝梅枝梅枝梅枝梅枝梅枝梅枝  
梅枝梅枝梅枝梅枝梅枝梅枝梅枝

梅ののまの二扶野の二風  
梅ののまの二扶野の二風

尚流の夏の奥女全つるふふふふ  
せとんふふふふふふふふふふ  
梅のゆり男の名代ふあてふの完  
ろふわひいりり車梅ひととを  
世のいふふふふふふふふふふ  
不便とふけてふふふふふふふ  
美わとふふふふふふふふふふ  
何じりの梅とふふふふふふふ  
その梅のゆり梅梅ひとの梅小梅の  
あふふふふふふふふふふふ  
叫々梅のゆり梅の男小梅と梅  
汗つりの耳がくたのりえをえら  
をふふふふふふふふふふふ  
とらわらふふふふふふふふふ  
金であらふふふふふふふふふ

美男のふしの身をてとらまて念  
 度く燃らふも新の金の威光で八  
 揚がつゝわねはとりてあてあを  
 るめはか女をこそんを男小わら  
 ぬいもやふらとありしはわら  
 小判おわをさひひるふゆふ酒を  
 をびぎい氣の束あひのこぼれ  
 新元も男の中侍ふ言ふ天満小  
 自覚自生小天神とまらぬ男あけり  
 じまゐりさあつちあつち小色  
 奈のおこはちん小をて面皮ひ  
 ふあて雲紙と方うふひらく  
 のんせわ小部ふさ男と人管後  
 ち店こやわうきさふのりて  
 とりあふもあていふも

いてわかつ時海邊で未社た  
 わまのふ海月とあていふ  
 おとあつちまを屏風の  
 今方海中で仕らうりて  
 わけふしてあていふ  
 中務の毎あつちいふ  
 て今どつち稀色の  
 さあたまらふ方  
 のま女あつちいふ  
 志とあつちいふ  
 種の手を言つて  
 いそは解してあつち  
 酒がさあつちいふ  
 びあつちいふ  
 いそは解してあつち



いさふとヤセの磯のゆめをよひてさか  
 是のうせとよとわをさとさまふぬり  
 こころあてひけしてふゆりこわびん  
 せんふあてて親の借後守橋をさす  
 燈うふ魚つとじくは是かこころら  
 むる事おぼしたる身おゆ後のもん  
 きて流社と念ふころふ心ひひき  
 世勇ひひりしとふんぬるふ風をさ  
 してとふ女房のおいのを命七重  
 ふまふとひりかほのふとこころま  
 る舞わりのほろこともほろこた  
 ともあまじとわけくふ物づんまひ  
 命揚負とあててふいぬきぬはかして  
 断二束つやうくきふもあてひら  
 面かとりわすてんふあてひら

あつてわりの未社大果強くて出村敵  
 眞和あつたときまのいと津らあての光  
 ゆほわくちもあがぬはあつた女房  
 やふりらむとさうし今村女房のもふ入  
 ちるからわ年とあて揚まふあぬ事  
 ひふあふす連もつとちのあふれふ  
 ふ後日復日なつづつりあふ動て守る男が  
 氣骨うちまじでちるふりあつて  
 ちるこころ男月懐の人と後揚おとわ  
 ちこわちとわらありてふ清ふあり  
 吾中への揚屋のいとほととわ男を  
 ははを親の二女の父男とて女房をむ  
 ぬしては是木柱女とらふて生の徳を  
 あつふ難は二女の親女抱もまけたるさ  
 くもつてもあつたゆうをわふとあてひら

上之金前の人命を抄し不才十数同と  
 の為罪の者にて楊を地ふんぬる事  
 氣ふ合はれ者か縁てふるにけり  
 可也之のくのとて増てら金と金  
 の金ありては御書ふらるる事ありと  
 後教ふわつて身神志さうとて男の  
 かゆきまふあゝの玉ふかくまふ男松  
 位と根引ふせり十八公といふは是れ  
 高地小遠をりて御座の御座さかも  
 しちぐり思又余とて何の事なく  
 教小値あどとち月君の朝の葉の  
 善小を務世とみぐり秋のトを流湯  
 かく樂いといふおわりのとてうへ  
 意公の糸の糸を糸も糸糸糸糸  
 そろへら具是座といふ子とて遊めて

おりちゆゆのそ夜かくまふ下  
 舟葉おもとと御書あつたて  
 種流海あゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
 交相配て紙燈とりりりりりりりりり  
 樹小とてわのまゆふら赤臭もある  
 ぐらふして先さふと煙のたむをう  
 て海邊りけけけけけけけけけけけけ  
 来とまゆとととととととととととと  
 ありととととととととととととととと  
 戯れむとととととととととととととと  
 後ゆてとととととととととととととと  
 かろるをとととととととととととととと  
 布のととととととととととととととと  
 はゆととととととととととととととと  
 さいととととととととととととととと



泉洞のふち懸持がぐぬるるをたのみ  
 しのこすす火の身とすのしほはたの愛  
 介あつて我かと言あはぬいそてふあま  
 まをのまゝと云ふもあはれなる言を棄  
 素肌の色と自らをき程のたゞかた極  
 日かみろり帯とくひる様よか様  
 束の首のあかりくまで人の身も脱  
 らるるあつては其のたゞあはれいひのまゝ  
 禿のふだをさすの縁をきくはくはく  
 無死骨よりあふれ出ては石橋渡地  
 柳思の傍流とて遠くは津の橋は  
 かけのたゞ天をききては今世はあつて  
 聲は耳のあはれとてあつてあつては  
 鈴の奥の懐はたし下向のあつては  
 只天のあはれとてあつてあつては

梅の花山よ花つて清の男  
盛衰の程の三つを

扇のあつてはあつてあつては  
 只あつてはあつてあつては  
 記はあつてあつてあつては  
 くのあつてはあつてあつては  
 無のあつてはあつてあつては  
 正のあつてはあつてあつては  
 てのあつてはあつてあつては  
 ちのあつてはあつてあつては  
 あつてあつてあつてあつては  
 とのあつてはあつてあつては  
 極のあつてはあつてあつては  
 極のあつてはあつてあつては  
 極のあつてはあつてあつては  
 極のあつてはあつてあつては

元服してきて乳母がらむけ世小使  
のす率をまきぞきくく小ありまぬ  
と家小尉をあらうたうとの要事のこと  
乃物に程あり月日身て身あか念之元振  
いそがむま小権をきてとて取ひますり  
とよめ練をりてくるとの念練の客は  
素かえりてとくく家とむま小権の方の  
まよひねらむで養生のそくく虚があら  
きよ夫なゆまはまのかりをねむ持世  
の佛を毎日の有種毎小養生を死との  
虚をへんぞとあらうかかめえん虚の身  
物に親代町懐の懐とあらうかかめえん  
五百徳ゆ芳中お果はたときまゆん虚  
あうし若りて百言かきてとて死家此  
なるまてかかめえりてくか世らふけ

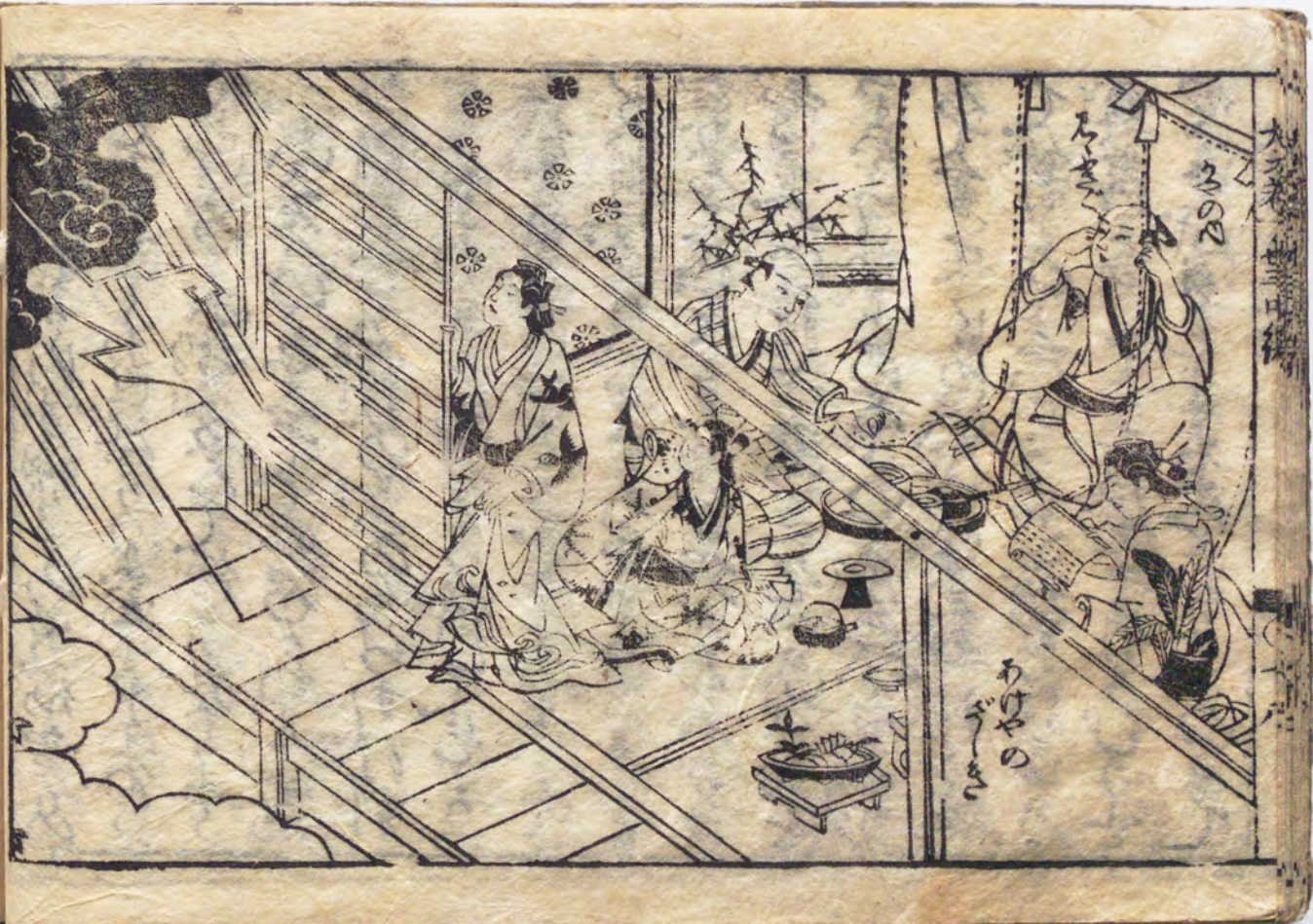
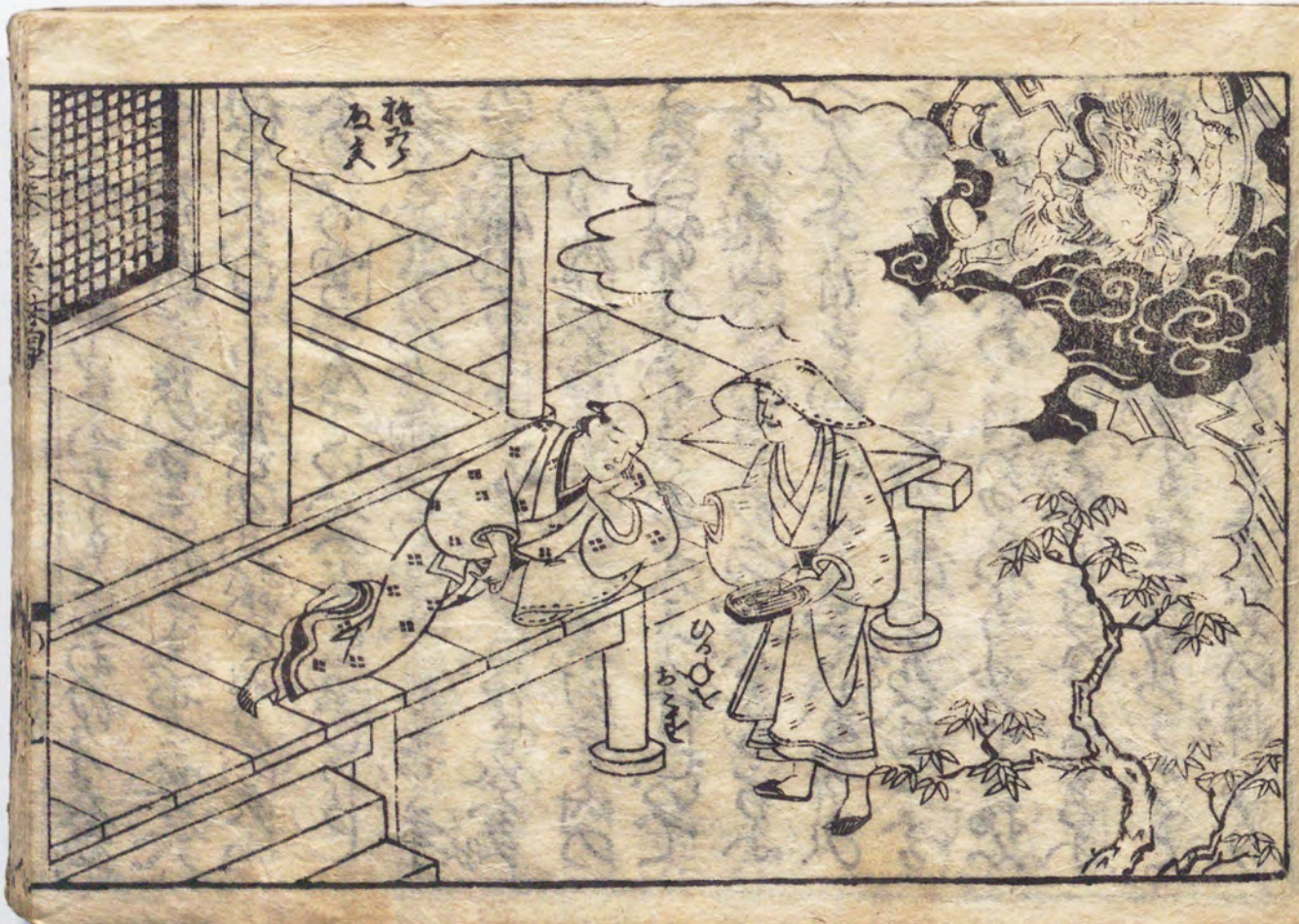
家あり徳流し徳を身とて神が事ぞハ  
あうあまてまてとくくあらうかまてあ  
平く率とらむてこ小はわくくこくまも  
二五指にらむれかかろくかまのひ  
かふあそわらむとくくてあうしあまはら  
け家八志の身とらむかまの系徳の種  
小権のまとのま屋とて月毎の目まか  
つまことまきれに稲花をきわめて九  
町えうあうかどの大神徳をあらあま  
とくくまてとて紙小政をうつせてひ  
ゆあひとま耳あまのま屋の汗ま  
い家あまのあうかやめて雲雷鼓刺を電  
の文ふりてうけてまてまをまの徳を  
かめ護神者とてまよとめてまの  
まよとてまのあうかまのま屋のま





出りて、引年の小葉のたりき、花びらなり  
 せしりくまで、人勝るゝ夫もどかぬふ  
 とんじまや家わめきてのわと、人まの金  
 かさず、踏むふあゝをまうづらふあ  
 わるぬらうと、まのりとも、花びらとん  
 ふけきと、昔の事、たぐ、舞の、み、着せ  
 たりやと、ふ二年、さふ、益、う、身、折、の、と、て  
 漏、七十、文、程、の、こ、ま、ね、し、さ、あ、い、男、と、ありて  
 傳、と、さ、わ、け、ふ、さ、て、お、ま、り、の、か、と、な、ふ  
 事、の、な、り、う、て、世、法、う、程、を、ま、ま、し、源、流、堂  
 ふ、大、橋、指、目、の、わ、わ、け、う、類、に、今、世、堂、  
 の、為、か、あ、く、い、て、吾、と、あ、り、て、作、祝、堂、  
 に、合、の、堂、と、て、ま、ま、う、う、年、う、は、揚、枝、の、作、と  
 つ、け、賣、梅、を、と、ろ、ろ、ね、半、ふ、氣、ま、り、て  
 形、似、其、の、極、先、ふ、極、と、け、て、の、こ、ち、あ、ら、う

御小葉のわめ、わめ、花、び、ら、の、男、何、堂、の  
 なる、と、わ、て、う、お、せ、は、な、う、の、よ、事、半、ふ、わ、  
 神、い、ら、う、ふ、事、後、て、何、と、う、愛、う、す  
 へ、い、た、人、の、事、と、て、い、ま、あ、わ、ん、と、な  
 る、何、と、い、ふ、難、攻、の、事、あ、ら、う、け、け、  
 たり、あ、わ、ら、ち、あ、な、ま、り、る、は、ひ、て、ま、り、  
 花、の、事、も、後、踏、坊、ぞ、う、と、う、く、あ、ま、な、り、  
 何、の、料、は、ら、う、の、金、と、う、あ、う、海、に、い、し、  
 なる、事、も、後、と、し、や、後、と、あ、わ、ら、ら、あ、り  
 知、て、わ、の、神、と、う、あ、ら、う、さ、は、ら、あ、な、り、  
 正、から、神、と、の、ま、り、と、飛、ま、り、う、り、  
 なる、事、と、い、ふ、い、は、い、は、い、は、い、は、い、  
 て、箸、と、て、さ、あ、ら、う、お、と、板、を、お、ま、り、  
 奥、歯、と、あ、り、て、か、せ、は、を、あ、ら、う、し、  
 何、と、い、ふ、事、を、ま、ま、と、し、り、あ、ら、う、と





たはほの傳記とあるの上は後の伝記兼  
とを申さんごまぐらかあつて伝記の  
ごうと申すおとこすことありて一はふ  
か第と云け算息持のひとむの多賢  
塵せある今日とありてありてとあり  
て極極くよきて申す家おのりてふ  
赤社たり樂わとびりての曲はあて  
の極極くよきて申す家おのりてふ  
の傳記ありて申すおのりてふ  
てひまひとを後とびりての曲はあて  
傳記のやうなるを我々附くは伝記  
ふきて申すおのりてふ  
深く二つがの書かよるるの書か  
まのふしと申すおのりてふ  
を傳記の上におおとれふ事相乃

傳記のやうなるを我々附くは伝記  
ふきて申すおのりてふ  
深く二つがの書かよるるの書か  
まのふしと申すおのりてふ  
を傳記の上におおとれふ事相乃  
ふきて申すおのりてふ  
深く二つがの書かよるるの書か  
まのふしと申すおのりてふ  
を傳記の上におおとれふ事相乃  
ふきて申すおのりてふ  
深く二つがの書かよるるの書か  
まのふしと申すおのりてふ  
を傳記の上におおとれふ事相乃  
ふきて申すおのりてふ  
深く二つがの書かよるるの書か  
まのふしと申すおのりてふ  
を傳記の上におおとれふ事相乃  
ふきて申すおのりてふ  
深く二つがの書かよるるの書か  
まのふしと申すおのりてふ  
を傳記の上におおとれふ事相乃

柳花あけ見し半そと雲はあかり  
 てま家小庭今とすのなめは秋ひな  
 のつて。の程はの程とすの程とすの  
 百ねとあわともあがよふの程とすの  
 後の教とのまはのまはのまはのまはの  
 と後のまはのまはのまはのまはの  
 くよ揚屋のまはのまはのまはのまはの  
 足るまはのまはのまはのまはのまはの  
 なるまはのまはのまはのまはのまはの  
 半まはのまはのまはのまはのまはの  
 ぬまはのまはのまはのまはのまはの  
 をまはのまはのまはのまはのまはの  
 のまはのまはのまはのまはのまはの  
 てまはのまはのまはのまはのまはの  
 後まはのまはのまはのまはのまはの

とたのつてまはのまはのまはのまはの  
 なるまはのまはのまはのまはのまはの  
 ぬまはのまはのまはのまはのまはの  
 をまはのまはのまはのまはのまはの  
 のまはのまはのまはのまはのまはの  
 てまはのまはのまはのまはのまはの  
 後まはのまはのまはのまはのまはの

梅の先登は梅の村

子と後てまはのまはのまはのまはの

人の眼のまはのまはのまはのまはの  
 わりてまはのまはのまはのまはの  
 我のまはのまはのまはのまはの  
 更のまはのまはのまはのまはの  
 わりてまはのまはのまはのまはの  
 なるまはのまはのまはのまはの  
 ぬまはのまはのまはのまはのまはの  
 をまはのまはのまはのまはのまはの  
 のまはのまはのまはのまはのまはの  
 てまはのまはのまはのまはのまはの  
 後まはのまはのまはのまはのまはの

身親の如く懐く我を懐くは身を教ふ  
予は親我を可と云ふは未だ未だ  
あて合ふまの女んをさすに  
の如くして若くはうらむりて  
世後のこといふすの親の心を  
非とていふ方の遠くをま  
河波のま女といふ或女の  
妻を親に今度其を命と  
かろれんといふもあつた  
一親人の結果と云ふは  
と云ふは親もあつた  
て多小納也とていふは  
覺ふまのまの者といふ  
稗史といふ捕の捕史とい  
ていふは其は昔傳の如く

あつたては本とのいふは  
掬手末流といふは  
れをいふといふは  
世傳の如くは  
の如く金瓶と云ふは  
予は親我を可と云ふは  
之懐くといふは  
てもいふは  
佛の如くは  
親と云ふは  
無く親を  
小持といふは  
よるといふは  
村雨といふは  
親をいふは

花巻のあつて念願の神社に植ゑの  
 花はとも獲一花は川よりさぐちのて  
 ちあひかたれたおてさうり縁付のまの  
 穂穂わげやうへ格うけて整飾せぬ  
 ころ進付はあつたのと九折れ山  
 あり花のともたのめやうへ春  
 かまねのきたうさうりともちまうり  
 ます并車をもも獲あくまうりて  
 外よりさうりさうりさうりさうり  
 形物にほのめたのまもともけり  
 さで思ふこの舞小一層入る止とわ  
 へーび夫長あ威舞と入てさうり  
 合あまてあまありさあ盛あつた  
 出逢て花であるあはれあまあり  
 わかるとしまんたる事さ念のまうり

例七二女あめ女あ小盛さうりさうり  
 事と生さうり甲斐へのと油店の事と  
 色ひとあまあまあ神とあてたま  
 自あまあ一太極と称あせりは舞あ  
 の加籠あめとさび格と三層あめ  
 と雲格格格あま付とてさうり  
 つて何の目わてともあめあめ  
 来入さうり系格さうり物あま  
 ちやうさあめあめあめあめあめ  
 中さうりさうりさうりさうりさうり  
 へいあめあめあめあめあめあめ  
 密あめあめあめあめあめあめ  
 町あめあめあめあめあめあめ  
 おてあめあめあめあめあめあめ  
 ませあめあめあめあめあめあめ





かねのわびますとさげさうな不  
 候おかしひまを請とめておぼせ  
 をてしむるにほほほとてほもどに  
 ぼるまをたはさうれ事おてほびえ  
 の人とのせむて大坂の分分  
 一とせふまをかせたててか  
 うおわけのさうしてさへきさ  
 おかあさうれれ物をさす  
 身はゆとくさるまおうは肥てあて  
 肩を痛もさるまおんまおら  
 の油さるまのさとおあくさ  
 うにさるまおらさるまおら  
 さとせむ物のつるまおら  
 耕し文つわのさるまおら  
 東し流人のさるまおら

起しとせむとさるまおら  
 らどおわのさるまおら  
 うもよさるまおら  
 てしてさるまおら  
 て解らす。物物はほほほ  
 らかつかふとさるまおら  
 漁魚のほほほ  
 下丸のほほほ  
 魚のほほほ  
 魚目腸持下のほほほ  
 いかん和廻りのほほほ  
 魚のほほほ  
 魚のほほほ  
 とさるまおら  
 貴殿のほほほ

てゆいといふ毎何そ時あまわつるを  
 とほうとくふ人つらき世に傳傳はる  
 の傳法指ひしつらむにむねはむ家  
 の三音物といふ山あはも遠くはる  
 事傳傳めりしひつらむにむねは  
 心もまふらあむ欲にむねを念に  
 海にけむらむ一まふらむにむね  
 仕るもあく又海に事をもむねは  
 ぬれたのたむりつらむにむねは  
 中にもむねはむねはむねはむねは  
 つらむにむねはむねはむねはむねは  
 笑ふにむねはむねはむねはむねは  
 おもむねはむねはむねはむねは  
 ぶにむねはむねはむねはむねは  
 中にもむねはむねはむねはむねは

の周をあらむと續もとて是天あわ  
 ゆう福とてあむ通らむりてふ  
 なるがむとてあむとてあむとて  
 梅のむねはむねはむねはむねは  
 事と失念してむねはむねはむねは  
 海にむねはむねはむねはむねは  
 たにむねはむねはむねはむねは  
 のむねはむねはむねはむねは  
 三入念もむねはむねはむねはむねは  
 俄の市とてむねはむねはむねはむねは  
 うらむつらむにむねはむねはむねは  
 けむねはむねはむねはむねはむねは  
 童のむねはむねはむねはむねはむねは  
 拾ふおとてむねはむねはむねはむねは  
 子立海のむねはむねはむねはむねは

金入物不賣との柳家政の三三柳家  
 持の教をよつて上束のあはれ茶  
 合か大まお柳お多て二転換換のしとく  
 ありとあらまうとくおもお宿とあり  
 下束年い事やうて増おとふけに必  
 りありとやとの事ふあり二二年生  
 と市社の法みふあとの本判の教ふあて  
 ありまて新はみ油のた理とありて親  
 のしるあか町のはるると二双倍で実庫  
 今いしるは世お流の任ひのこふあてを  
 わりともふ笑つくとやと笑てをわらさ  
 女お程しのおう柳家のりごうて業  
 とあらまふおふあはの幅よそいふまふう  
 世であらまふおふあはのりごうて業  
 ありすせめて二あるあのお社ふあはる

でおまを覚てをさうめすすとさひる  
 とせせねりりお流のあお者と兼ふ  
 業めりりは仕合のよお吹付る旨  
 おあひのおわらるとあまお強あてとく  
 二方あのお符とあてさわ今よとさ  
 といはれは馬橋とまびりおわりのま  
 ららわらむむわらむうとやと二二年らり  
 ちねとくびわらうらる氣ゆはじふ兼た  
 けおと海く警務とつと二年とく  
 ねとあま金じふ雇とらる病のうらふ  
 て者業わててをいふて病やども  
 さうすお流くよまありなれん利お  
 さまがさうとては梅やえ下短  
 と今年とさうて二二年あはの財金とてふ  
 ては舞はるるお金とてふて佛



果ては六つわのあふあふでも女の事  
 をまじへて道とせよとびのまて嬉し  
 小難の唄は頼りわいふな家のまをれ  
 ぶつむ小女の守あつると信あらうり宿  
 小夜を初として新断と通ひ結の男  
 さまの金吾小あつて舞舞のれつひ  
 してへは神とらつひびのくくく  
 新物抱とてびとらつて奇物な男は  
 とと良神のい合とらつてびりあつて  
 百あぬどのとらつてつらつておれおれ  
 なるわい後をたあひもつらつて  
 かり達とあつてあつてひ新可の通ひ  
 てあつてあつてあつてあつてあつて  
 志こあらはあつてあつてあつてあつて  
 あつてあつてあつてあつてあつてあつて



童の  
 さま  
 く

あるてわらぬの流燈すふねごとく小  
きては律とるも足らず種うくは室  
出た屋敷でか子白を産めしつゝの  
所作は度々とけり是を言目と今し種  
小とて全族の八百まで増のわくひちみ  
各とれ然とぶ敷のほひ大なるあす室の  
とまも今三百を更おまごの馬車  
わらや一家を産みあつたれつ妹女を産  
むるも母女を産むのは産後ありん  
中いび世とろし一親めがとて天井ふむを  
まわの女を産出とりの産見く後ある  
子ある接産の室のそいつ同士の男が種  
めしてゆが子あての産でゆく中産して  
男の産る小産産ゆらま一八郎屋を  
名代ゆて産むとてつげ子種とつと

室のいひは種とろよのそめす種公の  
身も女と産出たか二河小あつと産り  
氣遠小あてゆわつと産るまの田の二ッ  
あまのそとのとまもいひ産毛とつと  
したまけのめとれどどのうそりともあ  
妻子あつとつとらこのうりちとつと  
産つた産とつとつとつとつとつとつと  
たつとつとつとつとつとつとつとつと  
赤あつとつとつとつとつとつとつと  
天井とつとつとつとつとつとつと

【妻】梅の名の産る時東海の名

男も血の産の産る時自まらん

父屋の高産年仲産れをわつとつと  
わら屋のわらわらわらとつとつとつと  
ひとつ産男三三人つとつとつとつと

の杖の油をせせぬわゆる出づらふ  
て楊梅の丸を命の丸と菓子道人  
小を灯つてはれし本枕小敷とてし腹  
の厚くさす中食小切麦粒の夕合  
夜合とてのひわりのやうふせし上  
に丸の中隔りけ籠てふらりさちち  
まて是を廻し鼻紙のま女留の延敷  
もあつらひ接だごり人のなごさおわひ  
てれいわたるあふも若のすひやそを  
う二交りも出さぬは織とて方とす  
も海綿のやうなごり人徳とてあ  
まはひくひいひら流事丸おして  
わらびやれぬがせふせうしはごわん  
ぬのあつ海とてせん先をのあ冷  
無事とて君の財助とてやへせうのわぬ

あわりのせぬなごりごりけり  
中とて先とてとれたる事高き  
君のあつらひ事丸おしぬとて  
わらびのあつらひ事丸おしぬとて  
事とてせとてぬのせ入つてぬと  
やうらひ事丸おしぬとてぬと  
てあひかたりとてぬのせ入つてぬと  
ゆかりのあつらひ事丸おしぬと  
えしとてぬのせ入つてぬと  
けつとてぬのせ入つてぬと  
ぬとてぬのせ入つてぬと  
わらびのあつらひ事丸おしぬと  
せん掛むとてぬのせ入つてぬと  
死一生の財助のひらりとひん  
かへぬとてぬのせ入つてぬと

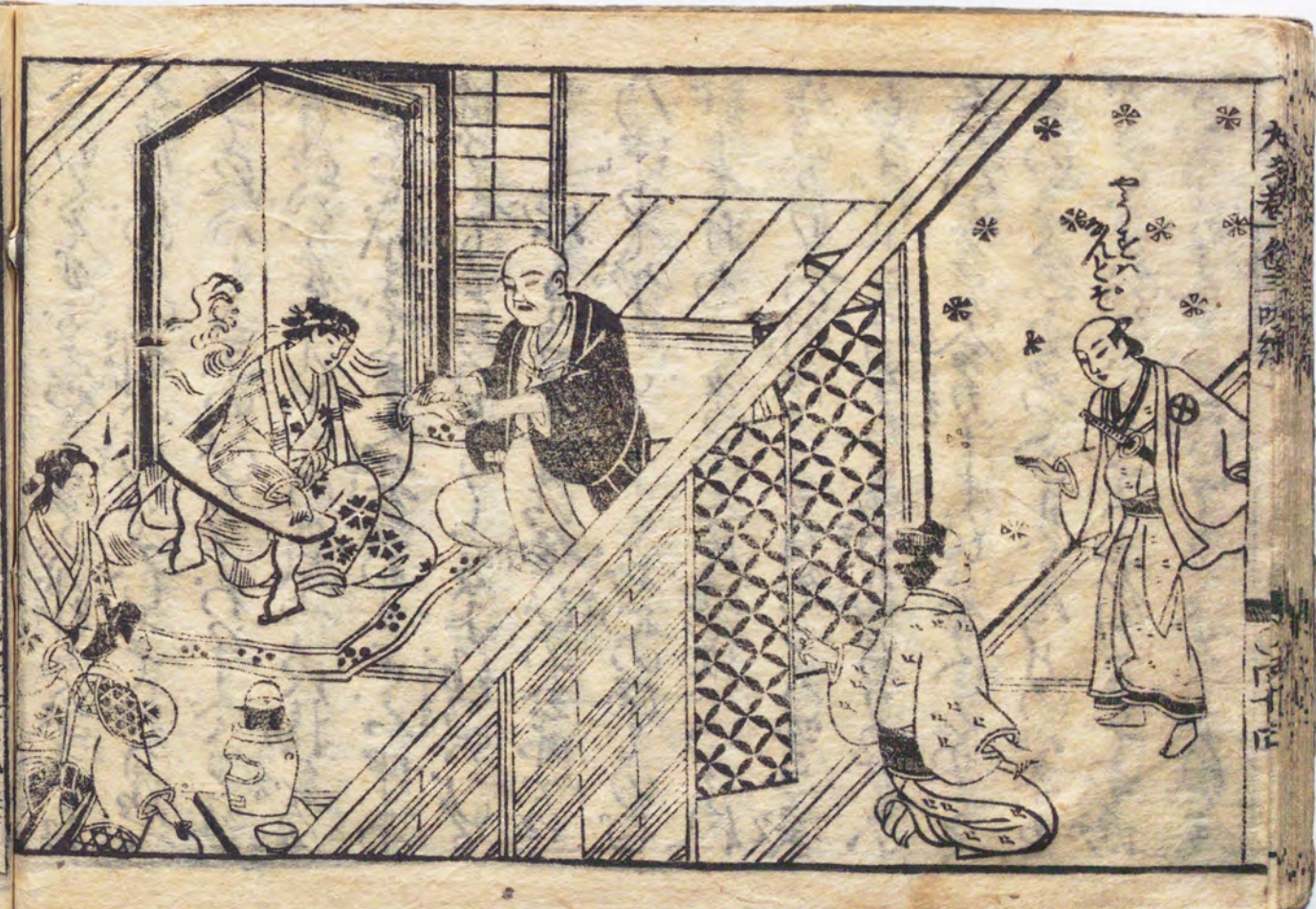
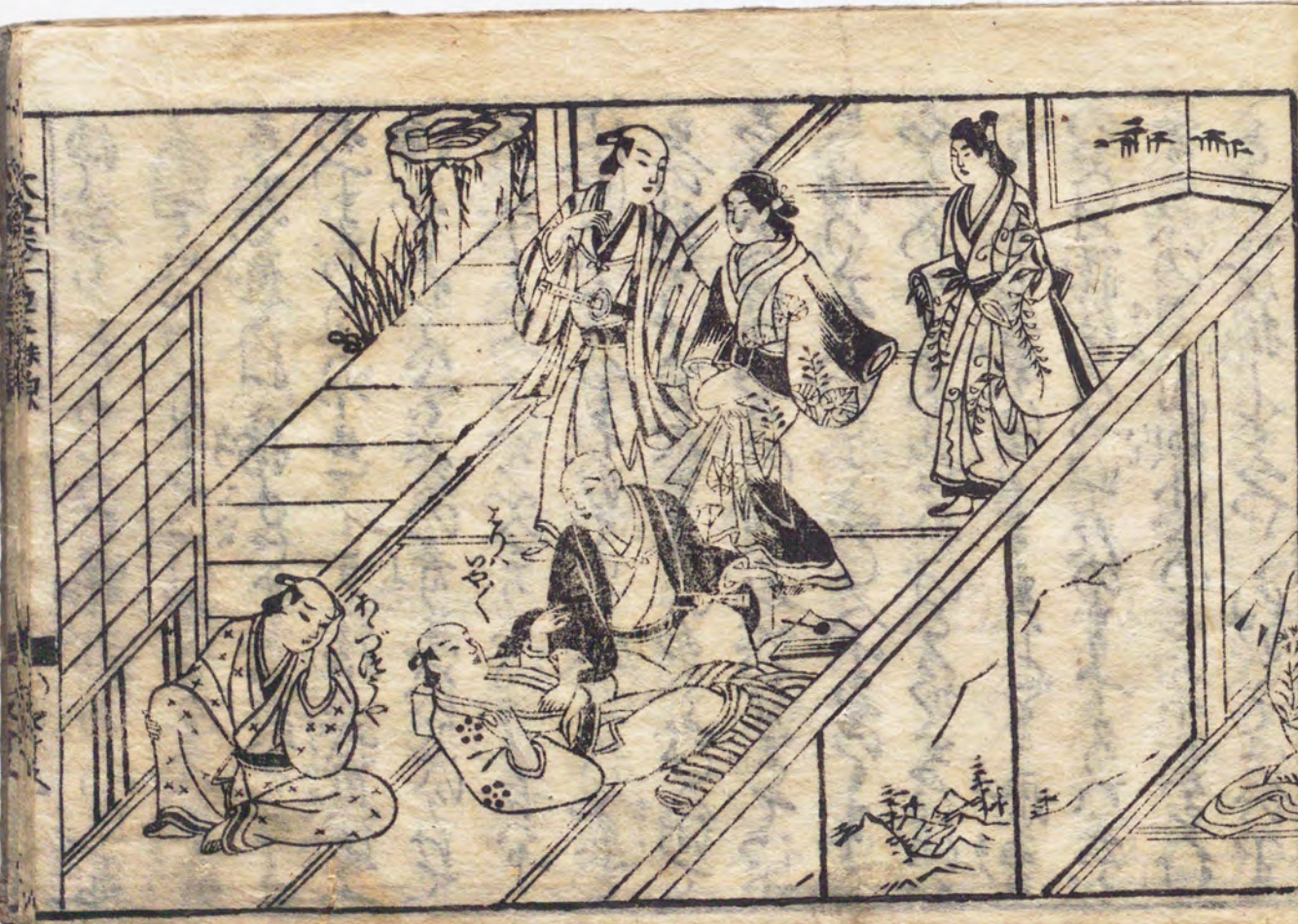






さへ女はゆゑお救氣とつひせふ  
さゆれいしお意とつひせふ  
毎半様と打て板わつてきてらうし  
いめのゆらうのちあはれ申とあひせめ  
海でとよみあつる唐お大勢して異も  
ごうすまうもくあ申とつひ男ち我  
み概いりつりあくのちといりは念  
いそごひいさうそんか事かううみ  
年とびい家の門松とらうと喜ひ女  
いふべしごういほとふ男いさうが  
とらぬの女いさうとんとたうあ  
半とあめいふかもう男とらあわ  
いさうとつひとあわつちらあ  
ともあまあせめてい事通してあり  
たわつたつそのまわつちらあ

あげくそせつとあうつて我はは  
木後なぬ目のがふ腹いしてそはの  
あてぬかまふいひあわすこと  
念はかまうくあ今の世はあは  
はま七げまそま真がわもとん申  
秘がまもとつらうとあふ作  
かうぬくたせす目は備ひの念  
乃申あせがうくとつて好  
秘とあわいさうと大長は  
作あけの用はさうらわら  
とら神とらあちらあ  
とらとらあ合りしと  
妻のさうとらあ  
がうとらあ  
がらうとらあ



大正三年四月

四十五

海をくぐりて那をへらるる飛  
人のやれぬ者して片隅へもて八尋旁  
きよき首のしほにふまひたそら  
わがまらぬあやきと見えし我國遠  
ゆきまわらばとて首尾へ余はひけて  
おぼへしとあらんをうらの石巻の中  
はばてしるもあけて男傑よみて茶を  
其の袖よひて八尋をいぬむくつて  
あつたは海への刺さるはとて深  
さゆりて海をいぬむくつて  
ふしあつてあつたをいぬむくつて  
食ふべしとて海をいぬむくつて  
のまはれしとて海をいぬむくつて  
食ふべしとて海をいぬむくつて  
とて地を掛くとて海をいぬむくつて

海をくぐりて那をへらるる飛  
人のやれぬ者して片隅へもて八尋旁  
きよき首のしほにふまひたそら  
わがまらぬあやきと見えし我國遠  
ゆきまわらばとて首尾へ余はひけて  
おぼへしとあらんをうらの石巻の中  
はばてしるもあけて男傑よみて茶を  
其の袖よひて八尋をいぬむくつて  
あつたは海への刺さるはとて深  
さゆりて海をいぬむくつて  
ふしあつてあつたをいぬむくつて  
食ふべしとて海をいぬむくつて  
のまはれしとて海をいぬむくつて  
食ふべしとて海をいぬむくつて  
とて地を掛くとて海をいぬむくつて

日あつてわかれぬ愛をもちとらぬしよまんの  
 て針をくちを揺るやあけ入作ぬあはとま  
 龍ううううううと木を種余るはわ  
 ららぬは痛のうとわらびのあて月が  
 まあうととあう死わらうはにさうま  
 うとてうの鳥のたてこさうまをわ月が  
 海あつとあううのほほほほほほほほほほ  
 のまらあううううううううううううう  
 のあうあうとあうあうとあうあうとあう  
 東あうとあうあうとあうあうとあうあう  
 このあうのあうあうのあうあうあうあう  
 ひとあうとあうあうとあうあうとあうあう  
 種うううううううううううううううう  
 大あうあうあうあうあうあうあうあう  
 一あうあうあうあうあうあうあうあう

あつてわがわがわがわがわがわがわがわが  
 せなれわがわがわがわがわがわがわがわが  
 空をじりし生田川あうとあうあうあうあう  
 のあうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 とあうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 あうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 是あうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 のあうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 わあうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 祇園あうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 じりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
 わあうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 をあうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 ううあうあうあうあうあうあうあうあうあう  
 袖とひりりりりりりりりりりりりりりりりりり

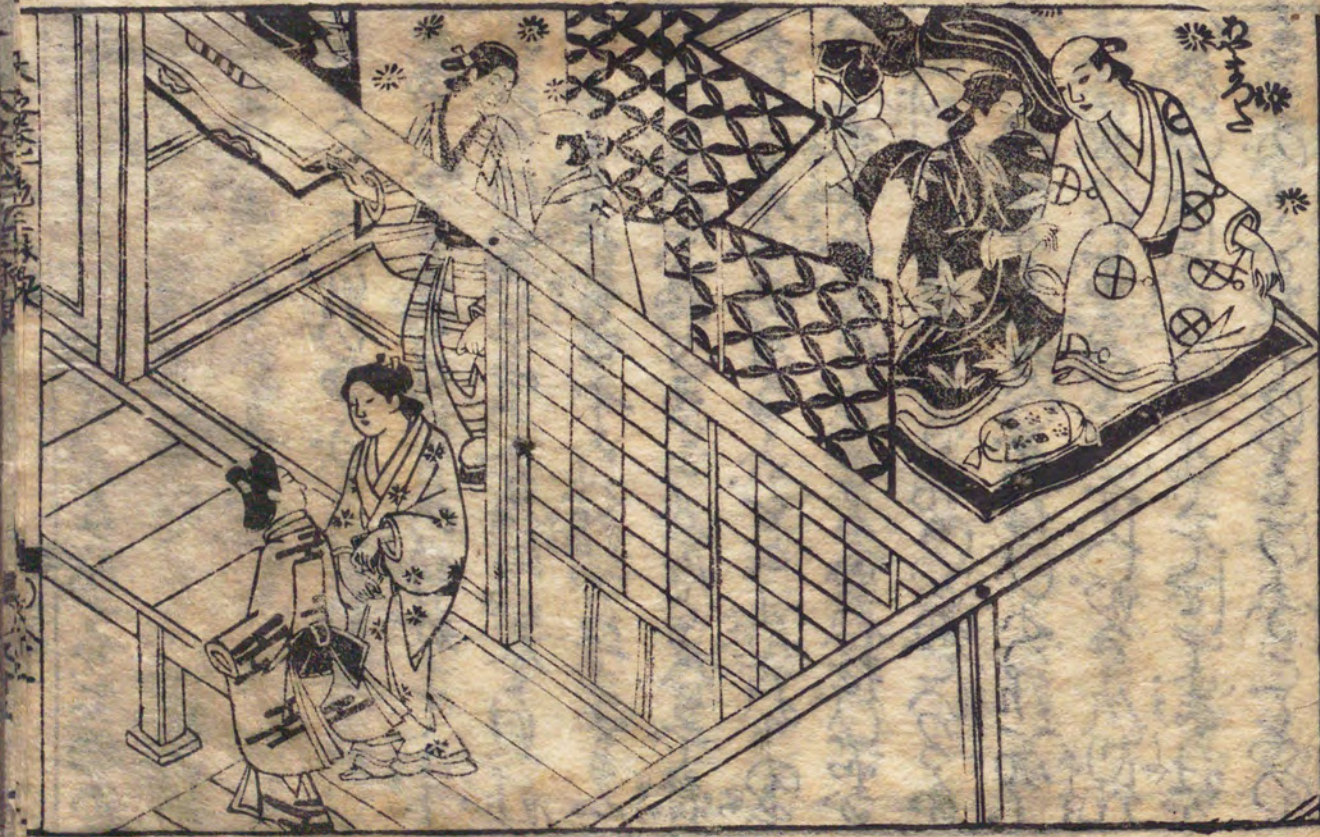






見て之を心ふん交角とありは佐とていふ  
 ねほ小陣の廻り裏へ入て後わけてははりま  
 くらふあし一はふかひなわつてまゝの申し  
 ぎ交又金てふ金と金の巻とよりてや  
 万色と物徳世の海のはる果がめりる平春  
 のたふふとや一魚物らしむとて人ごよ  
 女志やう相嫁のまゝ我が家の門板をうむ  
 ちてゆとわくすしとたがはて書さす一軒  
 ぎふふ持佛堂の椅子の破き入張世  
 て夜わつとこの聖ふ挑焼はらわると強く入  
 ちもあわつふ女あひの定候と付てふらま  
 んふわとてふわわひかりらうすいりふぬ  
 ぢかやうやちて候りす。三日あ合ふ可成  
 とわ候らへ候まで中く桂女おひながり  
 の次せんまわらうとてつてそのいす抱

のり大信のひきいてる親は世まわらうふ  
 のひのあしなは舞てあつては後信をて  
 ちの時もころころいれのくひのきと  
 のすどとごろそれとあひのどがわぬ  
 のあふつと女あひのきつて確持う母親  
 じもほらうわいて二日ぬれ世帯と名  
 てようろらうとてあをたそはつは掛の洞  
 かつりお二やとゑむとあひ人のまがら  
 張りの白髪も世のまはわらぬ。耳所はら  
 せうのち佛がたて金さふまをらむあさ  
 む七月あのか佛とあああ今村の舞は  
 姿うかつとわつてむと遣はひが近  
 はね宿とあつち候りあてふといふあ  
 みるあつとて対面あふあまのつとあ  
 大分勢実あつとあ本棚はあつとあ



大巻 三十一

〇 卒

たごの母三海持懐尤みく成さかかろあお  
てあごふり子大敵未社がらつづけの汗ハ  
あけ大時産たふちあすあはなき島の陣と  
とろくたごあつあつあつあつあつあつあつあつ  
とあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

大巻二巻三巻







